

# 礼拝さいこう

## 新型コロナウイルスに直面して教会は・・・④

教会音楽室長 江原美歌子

アフターコロナということばがより多く聞かれるようになった昨今ですが、未だもって混迷する世界情勢は変わらず、困窮する人々の叫びに向かい合い祈りをあわせる日々にあります。各教会・伝道所では、礼拝のあり方を模索し、感染しない・させないことに留意しつつ、毎週の礼拝に臨まれているのではないのでしょうか。コロナ感染危機の経験を通して、これまで受けてきた恵みの豊かさを覚えつつ、同時に課題と向き合う日々をいただいています。これらの気づきを、教会事例紹介やコメント、この中で開催されている研修会や語りあいの場から「ことば」を交わし合い、歩みたいと願っています。今号では、主によってどのような「ことば」が導かれるのでしょうか？協力伝道の輪にあって、対話と励ましあいのために応答をお寄せいただけましたら幸いです。

### Index

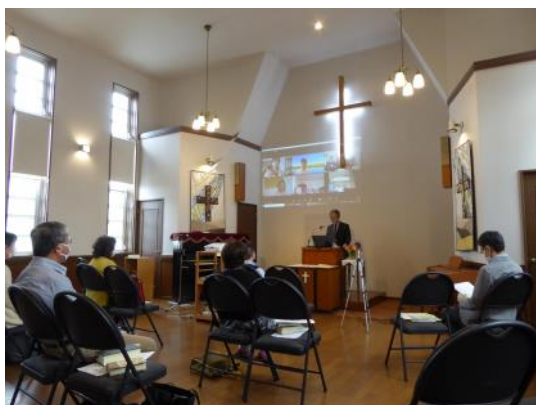
- 1) 「『二律背反』する世界の中で」・・・・・・・・・・・・・・・・小田衛（大富）
- 2) 「礼拝が捧げられる場所を守るために」・・・・・・・・天野英二（宇都宮）
- 3) 「コロナ下での礼拝・賛美」・・・・・・・・・・・・・・・・稲葉恭子（常盤台）
- 4) 「人数の少ない教会の大きな恵み」・・・・・・・・平良憲誠（福井）
- 5) 「コロナ事態における礼拝と賛美」・・・・・・・・李鎮鐵（京都洛西）
- 6) 「主が出会わせてくださる方がたと共に」・・・・・・齊藤弘司（北九州地方連合宣教支援センター）
- 7) 「礼拝継続が大前提／賛美の豊かな礼拝」・・・・・・・・城俊幸（西戸崎）
- 8) 「オンライン会議システムを用いた礼拝等」・・・・・・・・三上充（東熊本）
- 9) 教会の事例紹介を受けて～応答コメント・・・・・・・・濱野道雄（鳥栖）
- 10) 第3回教会音楽カフェ報告・・・・・・・・・・・・・・・・教会音楽室
- 11) 「『曖昧さ』の中で覚悟と希望を持って」・・・・・・篠原健治（福岡国際）
- 12) ペスト感染症と賛美歌・・・・・・・・・・・・・・・・江原美歌子
- 13) 「南九州地方連合伝道部2020年度研修会に参加して」・・・・濱田文代（熊本愛泉）
- 14) 「手話賛美研修会」報告（北九州連合教会音楽委員会）・・・・美登恭子（高須）
- 15) 礼拝と賛美歌著作権Q&A・・・・・・・・・・・・・・・・教会音楽室

# 新型コロナウイルスに直面して教会は・・・

## 『二律背反』する世界の中で

大富キリスト教会 小田 衛

新型コロナウイルス感染拡大が始まってから1年が過ぎ、その第4波が来襲していると言われていています。比較的感染者が少ないと思われていた東北も感染者数が増え、変異株が確認され始めました。その中でも宮城県は感染拡大を受け、4/5からまん延防止等重点措置が適用される地域に指定されました。仙台市は東北地方にとって比較的大きな都市で、そこから離れている大富教会付近でも感染者が出て、教会員の中学生が濃厚接触の疑いで、家族も含め検査を受けるという事態となりました。しかし、幸いなことに皆陰性で事なきを得ました。時を同じくして日本各地のキリスト教会における大きなクラスター発生の報道を受け、会堂での礼拝は近所に住むネット利用困難な教会員を中心に極小規模の礼拝とZOOM配信に急遽切り替えました。地域に対する教会としての配慮です。クリスマスとイースターは毎年讚美礼拝としてきた教会にとって2年続いたの寂しい礼拝となりましたが、ZOOM画面をスクリーンに投影し（写真）、司式者や児童説教者、献金の祈りなどの奉仕者を双方向で割り当てて行う礼拝はある種の一体感を醸し出すようになりました。もちろんそれは礼拝理解の合意があつてのことで、少しなりともインターネットを道具として使いこなせるよう



になったことを意味しています。会堂では特に換気と空気の流れに注意を払い、一節だけの賛美も心を込めて歌えるようにしています。新型コロナウイルスによって、世界はまさに二律背反する問題に直面し、教会の礼拝も集まることと集まらないこと、賛美することとしないことなど相反する問題と葛藤しています。しかし、生命を守ることと霊の命を守る礼拝とを両立するために、道具と知恵を用い、『教会員手帳2002』の「教会の約束」を元に作成した「大富教会の約束」に生きることを心掛けています。特に「個人や家庭での礼拝を心がけ、日々祈り、聖書に親しみ、賛美を欠かさぬ生活をいたします」という箇所を大切に、困難な時期を乗り越えたいと願っています。

ネヘミヤが城壁再建に苦勞する中、「仕事が多く、範囲は広い。わたしたちは互いに遠く離れて城壁の上に散らばっている。角笛の音を聞いたら、わたしたちのもとに集まれ。わたしたちの神はわたしたちのために戦ってくださる。」（ネヘミヤ4：13, 14）と語ったように、広い地域に点在する東北連合の諸教会にとって、一年、あるいは二年に一度の修養会や信徒大会で集まって捧げる礼拝、賛美には格別の意味がありました。しかし、それができない中、連合ではその現実を認め、ワクチンが行き渡り集団免疫を獲得するまで、そしてその後もインターネットを道具として利用することとし、連合として物理的（機器）、ソフト面（操作のノウハウなど）での支援を行うことを進めています。同時に、ネット利用困難な方々へのケアと配慮とを忘れないようにして行きたいと願っている今の状況です。

## 「礼拝が捧げられる場所を守るために」

宇都宮キリスト教会 天野英二

宇都宮教会の新型コロナウイルス感染防止対応としては、「教会に集まったの礼拝」を行っている時は、礼拝出席者に対し会堂入館時の手指のアルコール消毒、非接触体温計による体温測定、会堂入館(礼拝)中のマスク着用徹底、着席したまま小声での会衆賛美をお願いしてきました。

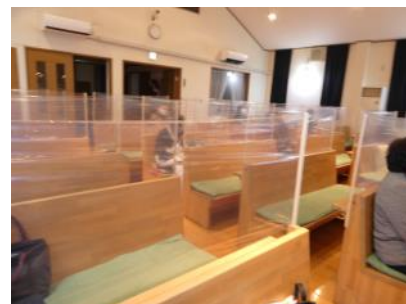
2020年4～5月末、8～9月末、2021年1月は栃木県に於ける急激な感染拡大を考慮して「教会に集まったの礼拝」休止決断を余儀なくされ、その間の礼拝については4～5月末までは当日夕刻からの教会専用サーバーによるWEBサイトでの礼拝録画閲覧と説教原稿の配布で対応、それ以降はZoomによるリモート出席(ライブ中継)を加えて対応しました。また、感染防止を考慮した物理的対策としては、司式者及び説教者からの飛沫防止対策として講壇前面全面プラスチックシールド、会衆席後部からの飛沫対策として長椅子の背もたれ部にビニールシートを設置しました(写真)。

具体的な主日プログラムについては、主の晩餐式の停止(2021.4より再開)、教会学校の全クラス休校、また、教会運営については責任役員会以外の会合の停止(必要に応じてLINEか電話で話し合いを進める)、清掃等会堂管理は教会移動中の感染リスクを考慮してほぼ全ての作業を基本的には牧師館で対応することとしました。

このような形で現在は落ち着いていますが、始め、これらの方針決定に至るまでの道程は決して容易なものではありませんでした。最初の

緊急事態宣言が発出される数日前から、責任役員会ではLINEグループを利用した会議により、昼夜問わず具体的な感染防止対策をどうするかほぼ毎日のように議論を深め、役員それぞれも、なれないスマホやパソコン操作に四苦八苦ししながら、皆が納得できるまで議論する作業は相当しんどかっただろうと思ひ起こします。ただ、そのような形で真剣に議論を深めることが出来たからこそ、最も大切な要素として、形式はどうかとも宇都宮教会での礼拝を決して「止めない」「止めさせない」という結論に至り、最終的にそれを納得して共有できたのだと思います。

「止めない」というのは、たとえ礼拝堂での礼拝が牧師館だけになってしまったとしても、説教原稿や録画によっていつも通りの時間に行われている礼拝を共有し宇都宮教会の礼拝が、決して「お休み」になるようなことはしないという決意です。また、社会的責任を伴う宗教施設でもある「教会」が不用意な判断によって感染クラスターとなることによって教会の宣教活動そのものが社会のシステムによって強制的に止められてしまうことを避けるということです。どのような理由にせよ、もし、教会の宣教活動が物理的に妨げられることになるとするな



ら、それは福音宣教に召された教会の業を自らの手で放棄し神の栄光を地に落とす事になるのだと理解し、そのような判断基準を元として、後の「教会に集まったの礼拝」休止、継続、再開に対して判断し決断してきました。もちろん、普段礼拝に出席しているメンバーにとっては、教会に集っての礼拝に出席できなくなることは生易しいことではなく、二度目の「教会に集まったの礼拝」休止から再開した最初の礼拝では教会で礼拝に出席できたことを心底喜ぶ涙声が会堂に数多く聞こえていました。だからこそ、改めて、今が良ければではなく、無謀な行動を慎み、耐えるべき時は耐え、一日も早くこ

## 「コロナ下での礼拝・賛美」

東京都に「まん延防止等重点措置」適用の現在、常盤台教会での礼拝は「家庭主日礼拝（奉仕者以外は原則配信での礼拝）」です。昨年、執事会では、COVID19のパンデミックを避け命を守ることを第一として、3/1主日礼拝より会堂での礼拝や諸活動を休会（配信礼拝）とする決断をしました。その後、WEB不可の方への礼拝CD・DVD、週報（説教要約）の送付を開始しつつ、6月末まで、この形を続けました。この間、全教会員にアンケートを実施し、第一～三礼拝と家庭礼拝の4つに出席者を分散、今後の感染状況に応じ、大まかに3つの段階の礼拝（A:3つの礼拝、B:2つの礼拝、C:配信礼拝）を選び取っていく想定としました。

こうして、7月初めより、感染防止対策を取り、Aでの集まったの礼拝を再開。程無く感染再拡大によりBに、12月末からは、これまで最大の

れから先、安心して礼拝を守って行けるよう祈りを合わせていこうと集まった皆さんと共に確認しあいました。

この一年間、信仰の友と共に教会で礼拝を守れることが、当たり前ではなくどれほど特別なことであり、恵みに満ちた喜びと幸いの出来事であったかと深く思わされてきました。週ごとに教会に集められる信仰の仲間と共に、この週しかない、この瞬間の「礼拝」の恵みを最大限の喜びと感謝をもって大切に頂いていきたいと願います。

### 常盤台バプテスト教会 礼拝部 稲葉恭子

感染拡大蔓延により、再びCの礼拝を決断、現在に至っています。

礼拝配信は、現在、毎週の礼拝に①音響②映像（PPT、カメラ操作等）③収録配信（ネットへの接続等）の最低3人の奉仕が必要で（写真）、各働きに2～4人の奉仕者を募り、ローテーションを組んで行うようになりました。当初は、土曜収録編集・翌主日配信で、技術に詳しい方が兎に角取り組むスタートとなりましたが、特定の方に奉仕が過重となり、礼拝の流れを損なわないようにと、再開の頃から日曜主日LIVE配信を行う形になりました。機器も、毎週の配信を



想定した機器では無かったので、次第に故障や性能不足が明らかになり、配信継続の為、長期を見据えた買換え検討が必要なのが現状です。

さて現在、会堂での礼拝は、マスク着用の上、会衆賛美は黙読又はハミングで行っています。COVID19が蔓延し出した当初、合唱練習によ



るクラスターが発生、亡くなる方も出たNEWSも聞き及び、飛沫感染のリスクを避ける安全第一の選択をしています。感染が下火になれば、日本合唱連盟のガイド

ラインに沿って徐々に賛美を再開していく想定でしたが、今もこの状況は続いており、個人また共同体にとって、賛美すること聴き合うことは生き生きとした神への応答、交わり、魂の養

いであって、礼拝・信仰生活にとって欠くべからざるものだったと痛感している日々です。しかし、この様な中でも出来る限りのこととして、手作りした透明パーテーション（写真）内でマイクを使つての賛美リードをする、また、アドベントでは6人までの賛美グループで3蜜を避けた動画収録を行い、特別賛美として礼拝で用いる等を試みました。どれも、実声での賛美が可能となるまで限定との認識で、その時を待ち望んでいます。

全てに制約があるようになって一年。今は個々が主に向き合い御言葉を静まって聴き、祈り、信仰の根を張る時が与えられている「神の時」と捉え、コロナ危機の中でもより強く結びあつていく共同体でありたいと願っています。

## 「人数の少ない教会の大きな恵み」

### ヒムプレイヤーを友として

福井キリスト教会は、このコロナ危機のなか、それまで以上に人が集まり、それまでできなかった普通の礼拝が守られるようになった。コロナが原因ではない。2019年度までは、84歳のたった一人の信徒Dさんが、礼拝堂で礼拝をまもって来られた。ヒムプレイヤーを友にして、一人で声高らかに賛美されていたのではと想像する。というのも、先週は、奏楽をされる方が急用ができ、前日にお休みとの連絡が入ったために、ヒムプレイヤーの久々の出番となった。妻も奏楽をするが、家族の手伝いで一月前から不在。これで、ヒムプレイヤーも二度目で

### 福井キリスト教会 平良憲誠

ある。前回は、電池がなくなっているのに気がつかず、鳴らしていたらいつの間にか音が小さくなって、しまいにはならなくなったので、アカペラで賛美することとなった。途端に、いろいろなパートに分かれた。現在、10名ほどで礼拝をまもっている。二度目のときには、準備万端、電池を取り換えた。この日のDさんは、朗々と賛美されていた。私が来てからは、『新生讚美歌』がほとんどで、それでも、Dさんのすばらしさは、それまで慣れ親しんできたものが数々あるだろうに、何ごとにもチャレンジしてくださることだ。耳も若干遠くなられているので、新しい賛美歌をおぼえるのは一苦労されるらしいが、一言も言われず、一生懸命覚えよ

うとされている姿に、教会の者たちは、随分と励まされるのである。しかし、この日、厚みのある声で、堂々と歌っておられるお姿を見て、「ああDさんは、この懐かしい賛美歌を今喜んでおられるのだ」と思った。

### 中部地方連合の兄弟姉妹が

#### 年季の入ったピアノとオルガンを

Dさんは、私が福井教会に着任した丁度一年前、「オルガンの生演奏で、みんなで賛美する日が来るなんて」と感動されていた。そう言えば、福井教会の宣教活動が始まった頃から使ってきたであろうこのオルガンは、私が来る前の年に、豊橋教会の小林大記先生がわざわざご自分の教会に持ち帰り、修理をしてくださったそう。ピアノも色褪せし、オルガンも木の部分がささくれだっているが、年季の入ったしびい音を両者とも出してくれる。昨年秋、旧会堂を壊すときにどうしようかと考えたが、まだ使えると、中部地方連合の少年少女会の皆さんとリーダーの秋山先生たちに頼んで牧師館に運んでもらった。現在は、牧師館で礼拝を守っている。牧師館の居間は、結構広く、そこを全面的に礼拝堂に見立てて、10人くらいの礼拝を守っている。ピアノは広い玄関に、オルガンは居間においてある。

### チョコのイースターエッグとお化けマスク

10名のうち、4名が信徒のお子さん。小学生が3人、一人はこの4月から中学生。この子どもたちの賛美が透き通った天使の歌声である。これまで二回、中学生のピアノ伴奏で、前に出て賛美してくれた。大人たちは感動のあまり拍手喝采。こどもたちは、他に、献金の奉仕と祈りをしてくれる。イースターの卵探しのときには、Dさんも私も本気モードで、一生懸命だった。Dさんが3個で私は4個。そうそう、卵を隠したのは、こどもたちだった。この卵は、このコロナ危機のなか、ゆで卵ではなく、チョコレート卵を今年は選択されたという東福岡教会のある信徒の方が送ってくださったものだ。ちなみにマスクもお化けマスクをこどもたちと作ってくださいと平尾教会の方が送ってくださった。人数の少ない小さな教会であるゆえに、多くの方々から祈りにおぼえてもらっていて、大きな恵みに与っている。



## 「コロナ事態における礼拝と賛美」

京都洛西教会 李 鎮鐵

コロナ事態の緊急事態宣言が私たちの教会の礼拝まで影響を及び始めたのは去年のイースターの頃からでした。2020年を振り返ると今まで誰も体験しなかったので、このような状況で牧師さえ適格に対処出来なかった戸惑った瞬間の辛さが思い出されています。キリスト教の歴史の中で信仰の先達はいかなる時にも命をかけて主日礼拝を共に捧げることを守って来ました。すなわち、この世からどのような弾圧や迫害があっても危険を冒しながら礼拝を守って来たのです。それがクリスチャンとしての信仰の証しであろうと信じて来ました。しかし、問題になったのはコロナ事態とは教会に対するこの世からの弾圧ではなく、この世のあらゆる社会が共に苦しんでいる禍であることです。礼拝を妨げる相手に対することより、自ら決めなければならない状況であるということです。これによって、今まで教会が守って来た伝統的な礼拝のパラダイムを考え直さなければならないようになりました。その中で、出来る限り、教会では礼拝堂での礼拝を守るために礼拝は中止することが出来ませんでした。ネットなどで一人で礼拝の出来ない方がいるからです。それで、礼拝後の交わりなどは中止し、出来る限り短い時間でできるように賛美歌やメッセージを短くしました。そして、集うことが出来ない兄弟姉妹たちのために週報にメッセージの要約を掲載し、メールで送信し、出来れば、礼拝時間に合わせてそれぞれの所で礼拝ができるようにしています。また、礼拝を午前と午後に分けて、午後2時から午後礼拝も始まるようになりました。この礼拝では奏楽者がいないので前奏と後奏はバイオリンで演奏され、宣教も賛美歌も午前の礼拝と同じものが捧げられます。そのようにして、時間の差はあっても共なる

礼拝を捧げているという意識を持つようにしています。その渦中で京都洛西教会には60年ぶりに二代目の牧師就任・按手式が行われました。文書稟議の総会でこの件が承認され、就任式は教会員のみのものでした。また、2021年度の総会も初めて文書稟議でするようになったのです。このように、礼拝のパラダイムの転換の始まりであると思われまます。

コロナ禍は長くても何ヶ月かでは終わるだろうと思っていましたが、一年も経った今なおお相変わらず続いています。しかも、いつ終わるかについて予測も出来ない状況です。いかに科学や医学が発達していてもこのような見えないウイルスさえ対処出来ない人間の限界を改めて感じています。このような不確実な時代を迎え、コロナ禍が終わっても以前の状況には完全に戻らないだろうと言っている人が少なくないです。それで、礼拝の本質についても改めて考えるようになっていきました。このようなコロナ禍の状況で、主は我らに何を求められ、主が喜ばれる礼拝は一体何かについてです。それについて、イエス様とサマリアの女との対話が思い出されます。「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」(ヨハネ 4:23-24)

何処でも、いつでも、形や場所を超えて、礼拝の主体である主が喜ばれる礼拝、すなわち霊と真理を持って真の礼拝を捧げるために、私たちは心を尽くす所存です。

## 「主が出会わせてくださる方がたと共に」

北九州地方連合宣教支援センター主事 齊藤弘司

新型コロナウイルス感染症の流行により、諸教会・伝道所の宣教活動が制約を受けるようになって一年が経ちました。北九州地方連合の加入教会の中には、礼拝における会衆賛美を取りやめている教会や、主の晩餐式を見合わせている教会が複数あります。それぞれの教会では慎重かつ丁寧な合意形成が行われています。

宣教支援センターでは2020年9月に「コロナ禍の教会の宣教を考えるアンケート調査」を実施しました。北九州地方連合に加入する28教会のうち23教会（82%）から回答が寄せられました。

「コロナ禍になる前と後で、あなたの教会の宣教に変化はありましたか」という問いに対して、「大きく変わった」2教会、「やや変わった」10教会、「あまり変わらない」6教会、「変わらない」5教会という回答が寄せられました。

変化があった理由としては、①人心の乱れが予想される中で、コロナ禍に対抗できる宣教を世の中に発信する必要があるから。②教会と社会が、弱さや脆さという共通項でつながっており一体であることを認識したから、などが挙げられていました。

変わらない理由としては、①福音の本質が変わるわけではないから。②教会の立ち位置は変わらないから、などが挙げられていました。

福音は「人を生かす」という明確な矢印を示しています。とりなしの祈りは、相手の状況を想像しながら為されるものです。他者性を抜きにしては成り立ちません。街に住む人びとが不安の中に

置かれている今こそ、何らかの「接点」を持つ必要があると考えます。

諸教会の伝道意欲を引き出す必要を強く感じた私たちは、2020.11.28.（土）東八幡キリスト教会において、「第1回教会を新たにする研修会」（写真）

を開催しました。講師に松谷信司さん（キリスト新聞社



代表取締役社長）をお迎えし、「教会の発信がイマイチ刺さらない本当の理由」という題で講演をしていただきました。刺激的なお話の中で松谷さんが繰り返し投げかけてくださったこと、それは「神を愛しなさい」「隣人を愛しなさい」という新約聖書の誠めを実行することでした。

主日礼拝は熱心な信者だけが集う場所ではありません。最近では礼拝の動画を観て、キリスト教会の礼拝を体験したいという方が、教会に来られることもあります。「にわか」に礼拝に来られた方に、当然のように個人情報を書かせたり、聞かれてもいないのに上から目線で教えようとしたりするならば、相手はよい気持ちがしないでしょう。松谷さんからの問題提起は、「一人を大事にする」という原点への立ち返りを促すものでした。

聞かれたことに答える。双方向の対話は、相手と同じ目線に立つことによって成り立ちます。私たちの伝道も、目線を合わせて相手の話を聴くことから始まるのです。



## 「礼拝継続が大前提／賛美の豊かな礼拝」

西戸崎キリスト教会 城俊幸

2020.3.1. 緊急役員会で、「コロナ禍における礼拝」をどうすべきかを話し合いました。役員会は「礼拝継続が大前提」とし、継続のために、どのような対策が必要なのか、クラスターが発生しないように、できること全てを実施しようと決めました。不安で礼拝に来られない方に、どうしたら安心していただけるのか。4月以降「感染防止対策委員会」を設置。毎週、暗中模索で、対策を積み上げていきました。そのような中、葬儀もありました。しかし、一度も休止することなく、通常通りの礼拝が守られました。

西戸崎教会の礼拝では、み言葉・賛美・奉仕・祈りが大切なので、「この4つが制限されないように」心がけました。十分にみ言葉をいただき、精一杯の賛美、奉仕、祈りを、「賛美の豊かな礼拝」（こども賛美・プレイズ・『新生讃美歌』／オルガン・ピアノ・ギター・ベース・ドラム）を、主に献げられる喜びを優先しました。

飛沫感染・接触感染が主たる原因と知り、その具体的な防止策をできる限り実施しました。

- ①講壇シールド（プラスチック板）・ソングリーダーシールド（ブロック・棒・サララップ）・会堂席シールド（角材・サララップ）・ホール席シールド（長机2段）・可動シールド（コートハンガー）
- ②会堂全席にシールドを敷設したので、礼拝人数を制限せずに済みました。
- ③大型モニター2台設置。
- ④受付に問診表・体温計。各自検温・記入。  
37.5度以上の場合、出席を控えてもらう。
- ⑤マスク着用・手指消毒の徹底。
- ⑥「感染防止対策まめ知識」を毎月発行。
- ⑦「感染防止対策委員会」を毎月開催。
- ⑧施設消毒（次亜塩素酸で週2回）、換気。

⑨YouTube配信ではメッセージのみ。

（賛美歌などの著作権の問題から）

遠隔地会員は、ネット礼拝を喜んだ。

⑩欠席者には、礼拝音声CDと週報を配達。

⑪LINEでのライブ礼拝、ライブ祈禱会も実施。  
（こちらは制限なしで配信）

⑫主の晩餐は、いのちのこぼれ社の個包装セットで落ちつく。

解決できない課題もありました。神の家族の交わり・食卓がいまだもてず、意思疎通の機会が少なくなったことです。良かったことは、神の家族と一緒に「顔と顔を合わせる」礼拝の大切さを再認識しました。外への伝道が限られ、教会内の信仰の継承にも目が向きました。

この一年は、コロナ禍の中でも礼拝が守られ、感謝でした。6月以降、祈り会・教会学校・教会行事・教室活動もほぼ実施できました。ところが、牧師が心筋梗塞で倒れ、1ヶ月入院。それでも執事の奮闘で、礼拝は保たれました。出席者も激減せず（平均31名→28名）、献金は10%増でした。自分たちが何を大切にしているのかを、知らされた年でした。私たちのステイホームはまさに教会でした。それゆえ、教会が、多くの人の心のホームになれたらいいのにと祈ります。日々戦い続けている医療従事者の健康が守られますように祈ります。



## 「オンライン会議システムを用いた礼拝等」

東熊本キリスト教会 三上 充

東熊本キリスト教会は、2020年3月後半～5月末まで、礼拝をはじめとした教会のプログラムを停止しました。この期間中は、教会に連なる方々がそれぞれ「家庭礼拝」を行いました。それから、2020年6月から現在にいたるまで、Webex Meeting（以下、Webex）というオンライン会議システムを用いて礼拝をリアルタイムで配信しています。可能な方にはできるだけWebexで参加していただき、Webexを用いるのが難しい方には実際に礼拝堂に集まっていたくようにしています。

私たちの教会に連なる方々は、それなりの速度が出るインターネットを使える環境にある方であれば、ほとんどの方がWebexを使うことができます。「パソコンやスマートフォンなどを持っていても、これまではあまり使ってこなかったような方々」でも、最初の1,2回だけ参加の仕方を一緒に確認すれば、それ以降はスムーズにご自分だけで参加できています。Webexで参加されている方々の多くは、実際に礼拝堂に集まって礼拝できる日が来ることを願いつつも、ネットを通して礼拝にリアルタイムで参加できることを喜んでいました。また、「これからさらに年数を経て、自分が自由に外出するのが難しくなる将来」を想定しつつ、オンライン会議システムによって礼拝へ参加する道が確保されたことを喜んでいらっしゃる方もいます。

Webexの導入は、牧師の私が執事会に提案し、執事会で承認されて決定しました。また、私たちの教会がZoomではなくWebexを用いているのは、「値段が少し安い」というだけの理由です。ZoomもWebexも、機能的にはほとんど違いがないかと思います。社会全体ではZoomが圧倒的なシェアを持っていますので、今にして思えば私たちの教会もZoomを使い始めれば良かったと思っています。

礼拝の配信においては、Webexの「ミュージックモード」という機能を使っています。同様の機能はZoomにもありますが、この機能を使えば「奏楽」等の「人間の声以外の音」も比較的クリアに配信することができます。とはいえ、賛美歌の際に「奏楽」と「人間の歌声」が混じると、「人間の歌声」の方を強く配信してしまっています。現在はJabraというメーカーのSpeak 510という会議用マイクを用いて礼拝の音を拾っておりますが、配信される礼拝の音質をより高めるために、收音のための機器を変えようかと考えているところです。音質だけにとどまらず、配信される礼拝の質を高めるために改善すべき点はまだまだあると考えています。

Webexを用いるようになり、「思いがあっても礼拝に毎週参加することが難しい」状況にあった方々が、毎週共に礼拝を行うことができるようになってきました。また、ゲスト説教者が熊本県外の自宅にいながら、私たちの礼拝の説教をして下さるということもありました。私は正直、「実際に集まって、顔と顔を合わせて共にする礼拝」と比べると、「オンライン会議システムを用いた礼拝」には何か物足りなさや寂しさを感じてしまっています。それでも、「オンライン会議システム礼拝」という礼拝にアクセスできる強力な選択肢が増えたことを、多くの方が喜んでいました。新型コロナ危機が終息しても、オンライン会議システムを用いた礼拝配信を続けていくつもりです。

最後になりますが、祈祷会でもWebexを使っております。それによって、以前の祈祷会のあり方とほとんど変わることのないあり方（双方向での祈り合い、意見の交換、対話）で、かつ変わらない人数で、祈祷会を行うことができます。

## 応答コメント

濱野 道雄（鳥栖キリスト教会、西南学院大学神学部教授）

6月の党首討論で菅総理大臣は「ワクチン接種こそが切り札だ。10月から11月にかけて必要な国民、希望する方すべてを終える、そうしたことも実現したい」と言いました。しかしそれは本当に全てを解決する「切り札」でしょうか。東日本大震災に際して社会学者の仁平典宏氏が言った「災間」（現在は単に災害後ではなく、災害と次の災害の間である）という言葉が示すように、「パンデミック間」というものを私たちは生きていくと思った方が良いのかもしれませんが、今号 11) に篠原健治先生が書いておられるように「『ビフォアコロナ (Before Corona) 』には戻れない覚悟」が、私も必要に思います。コロナにより見えてきた、コロナ前からあった課題に取り組むことこそが、コロナ後の私たちの歩みになるからです。

実際に最近、「このコロナが収束したら、リモート礼拝等、教会で始めたことは続けますか？」といった話題が増えています。そして連盟の総会を含む様々な集まりにおいても、そのような可能性が議論されています。

勿論、コロナ前から「礼拝の本質」も「福音の本質」も変わらないのです（北九州地方連合宣教センター）。『礼拝さいこう』No.19に記したように、礼拝とは「天の『宴会』が地上になだれ込み、そこに全ての人が招かれ共に祝う時」、いえ「祝おうとする時」だと私は思っています。ただ、それを教会が、私たちが、私が本当に理解していたのか問われたのがこの1年半だったのではないのでしょうか。「今は個々が主に向き合い御言葉を静まって聴き、祈り、信仰の根を張る時が与えられている『神の時』と捉え」（常盤台）、そして「礼拝の本質についても改めて考えるようになった」（京都洛西）のです。私は『礼拝さいこう』No.20に記して下さったふじみ教会の「なんだか恨み節で心は枯れ、無力感でしぼんでしまいそうだ」という言葉がずっと頭から離れません。私自身がそう思う時があるからです。にもかかわらず、痛み、問い続けた者の隣で、イエスもまた痛

み、問い続けていてくれるのだと思います。そしてそれを問い続けた教会に、何か新しい言葉が少しずつ、芽吹いてきているのかもしれませんが。

コロナをきっかけに私たちが気づけたこと、気づこうとしていることは何でしょうか。そこから何を私たちはコロナ後も、パンデミック間の時代、続けていくのでしょうか。

まず「礼拝とは何か」そのものの問いが深まり、気づきが与えられたのだと思います。「西戸崎教会の礼拝では、み言葉・賛美・奉仕・祈りが大切なので、『この4つが制限されないように』心がけました」と記して下さったように、礼拝の欠かせない要素を掘り下げ、実行なさった教会は、貴重な礼拝指針を手に入れ、コロナ後もそれを活かしてゆかれることでしょう。

そして礼拝とはやはり神が主催者である祝宴であり、J.E.バークハートが『礼拝とは何か』で記しているように「私たちが『喜び祝い、主に仕える』ときにのみ、礼拝は意味あるものとなる」のだと気づかされます。礼拝は、「説教と称した講演会を聴く義務を果たす時」ではなく、「ああDさんは、この懐かしい賛美歌を今喜んでおられるのだ」「子どもたちの賛美が透き通った天使の歌声である。…大人たちは感動のあまり拍手喝采」（福井）といった姿が見られるのが礼拝の時なのだと思います。

その上でさらにいくつかのことに、コロナをきっかけとして気づかされます。一つは身体をもって共に集えることがどれだけ嬉しいかという事です。リモート礼拝もリモート礼典も立派な礼拝であり礼典であると私は考えていると同時に、緊急事態宣言の後、リモート礼拝に出席しつつ、対面礼拝だったらなあと寂しい思いもしています。礼拝という祝宴はいかにリモートで喜び祝えるのでしょうか。そのために様々な工夫を私たちは試行錯誤して来ました。「ZOOM画面をスクリーンに投影し、司会者や児童説教者、献金の祈

## 事例紹介に回答して

りなどの奉仕者を双方向で割り当てて行う礼拝はある種の一体感を醸し出す」（大富）といった、リモートでも喜び祝う方法を開発された教会に敬意を表します。同時に「『オンライン会議システムを用いた礼拝』には何か物足りなさや寂しさを感じてしまっています」（東熊本）と正直に記して下さっているように、まだ課題があることも分かります。実際、礼拝でなくとも、「リモートコンサート」や「リモート演劇」、「リモート飲み会」とか、皆さんは楽しいですかね…？

でも、リモート画面に映っているのが、共に生きたい大切な人であれば、それでも食い入るようにその画面を見るでしょう。だからこそ身体は、私たちを互いにつなぐための、神からの大切なプレゼントであったと気が付かされます。「信仰の友と共に教会で礼拝を守れることが、当たり前ではなくどれほど特別なことであり、恵みに満ちた喜びと幸いの出来事であったか」（宇都宮）、コロナ前はそれを私は実は理解していなかったことを知らされます。そしてこれまでは私は私の身体を、他の人と共に生きるため大切なものとして「用いて」いたのか、いえ、生きていたのかと反省します。実際、コロナ前に心や身体の状態から身体をもって礼拝に集う事が叶わなかった人々と共に、エッセンシャルワーカー等、日曜も働くために身体を教会に運べない人々と共に、どれだけ共に生きようとしていたのかを反省させられます。そして少しでも反省したからには「ビフォアコロナ」には戻れません。私たちを互いをつなぐ身体は、それがどのような状態であれ、神の大切なプレゼントです。「主は体のためにおられる」（I コリ6:13）。

しかし同時に、もうひとつ気が付くことは、礼拝という祝宴は、ただ感情的に楽しいというより、神に与えられたリアルな人生を喜ぶ時なのだということです。ただ楽しい祝宴を求めてきただけならば、リモート礼拝になり、それが感じにくくなったとき、自分の教会の礼拝を離れていく、あるいは他の教会のショーアップさ

れた礼拝や、より楽しい、あるいは「為になりそうな」説教の方ばかりをインターネットで見ってしまう、ということが起こらないでしょうか。

今年の夏、青年大会に招いていただき、共に礼拝について考える時を過ごすことになりました。準備の中で青年の皆さんから、様々なことに気づかせてもらっています。青年大会実行委員会の方々は『第59回全国青年大会ニュースレター』No.1にこう書いていらっしゃいます。「オンライン礼拝になって教会の人との交わりが疎遠になっている今、教会に行く意味を見失う人だっている...これまで通りの礼拝ができない中、『どのように信仰を保っていけばよいのか?』『どのように礼拝を守っていけばよいのだろうか?』」

スイッチ一つで参加出来たり途中で止めたりできるリモート礼拝が続き、何で自分の教会の礼拝に参加しているのか、参加していたのか分からなくなって来た。コロナ前は、礼拝ではなく、教会で仲間と会うと楽しいから行っていただけだったのか。習慣や義務で行っていただけだったのか。コロナ前から、礼拝をかけたがないリアルな人生の場と感じていなかったから、身体を運ぶことができなくなった時、もうテレビ番組のように「見ても見なくてもいい」ものに礼拝がなってしまったのか。「見て楽しい、為になる」他の教会の礼拝を「見る」のか。

バークハートは、礼拝の中で私たちは神の恵みを「認識」し、その恵みを生きる人生を「リハーサル」し、その喜びの人生を広く世界に示すことで神の恵みを「宣べ伝える」のだと言います。確かに私たちは人生を礼拝で神に感謝します。ただ、そこでリハーサルする私たちのリアルな人生は、いつも楽しいばかりではありません。冴えない日々もあるし、完璧な人生などありません。それでも生きていることは嬉しいことなのだを知る、「認識」する。そして生きるとは、異なる、気が合わないかもしれない、意見が合わないかもしれない人と、それでも共に生きる事なのだを知り、その練習を、「リハーサル」をする。そしてそんな、いつもパッ

としている訳ではないけれども、共に生きる。また今週も共に生きる。神から頂いたこのいのちは、それでもやはり嬉しい。そこには深い喜びがある。そんな姿をこの世界に見てもらい、「宣べ伝える」。それが礼拝なのではないでしょうか。だからやはり、礼拝は喜びの時なのです。そのこ

とに私たちがコロナの経験を通して実感し気付いたとしたら、コロナ後も、表面的ではなくより深いところで、「霊と真実をもって」（ヨハネ4:23）喜びの礼拝を求め、具体的な形にし続けられるのではないのでしょうか。

## ～第3回「教会音楽カフェ」報告～

5/11(火)13～15時、第3回「教会音楽カフェ」に総勢25名（内新メンバー8名）がウェブを介して集まり、「ウェブ礼拝」をテーマについて語りあいました。以下、参加者からの感想をご紹介します。

### 大井バプテスト教会 菊地るみ子

今回も、新しい参加者との出会いを感謝します。それぞれの教会で奮闘していること、あるいは恵みを分かち合えることはとても励ましになります。

テーマを事前に提示していただきありがとうございました。印象的だったのは、「オンライン礼拝の心得ガイドライン」なるものが、ある教会では作られていることを伺ったことです。「なるほど」と思ったと同時に、生活空間での礼拝（オンライン礼拝）と、〇〇教会礼拝堂での礼拝（集っての礼拝）に私たちのモチベーション、気持ち、緊張感、意気込み、服装、礼拝に与る時間帯、席上献金の仕方、見られている、見られていない、など、精神的な面で大きな違いがあることに気づかされました。ネット配信が可能になり、教会に行かない信仰生活になり、顔を合わせての交わり（多様な隣人との交わり）がなくなるなど大きく変わった昨今を、神さまは私たちをどのようにご覧になっておられるのでしょうか。今更ながら、「全てをご存知で、見ておられる神さま。礼拝してほしいと招く神さま。愛を注いでくださる神さま。」であることにハッとさせられました。

「私」「私たち」はその神さまをどのように賛美し、祈り、自分自身をささげ、応答できるのか、この状態に慣れて？しまった今だからこそ、大きな反省と前に進むための方向性を示されたと思います。

### 松山西キリスト教会 立田卓也

ZOOMができることの恵み。それが当たり前になってしまった1年後を、本当に今のままでいいのだろうか、この賜物を土の中に埋めたままで教会員だけの恵みとしていいのか、悩みながら“礼拝さいこう”されている皆さんの食欲さに共鳴します。何かができることもできないことも恵みと受け止めて、主に近づくべく、多くの人と心を合わせたい。その一つの手段が歌声だったけど、でも他の手段もありそうだ、現在の礼拝の雛形にこだわらずみんなで探してみよう、ひょっとしたら個人の数だけ礼拝の捧げ方があったのか！と。

地域づくりの文脈からですが、コロナ危機は感染対策も含めて「自ら」考えていくことが迫られているとの見方に、物的なものにすぎない〈パーソナル〉コンピュータが「自ら・個」を補完してくれている中で、私たちの信仰も、どのような環境下に置かれようとも、私の神・あなたの主を、共に見上げて作り上げていく礼拝を今この時に臨み続けたい。そうでなければ、アフターコロナになって以前と変わらない礼拝を取り戻したところで、信仰の継承なんてものは起こらないと、過疎の地に住む者として想像しています。



第4回教会音楽カフェ 日程7/6(火)19時～21時

←申込みはこちら どなたでも歓迎です！

# 「曖昧さ」の中で覚悟と希望を持って

福岡国際キリスト教会 篠原健治

## 「黙唱」?

昨年以來、新型コロナウイルス感染の予防の一環として「ソーシャルディスタンス」という言葉は世の中に定着し、最近では「マスク会食」「黙食」も普通のことになった。

一方、あるミッションスクールや教会では、賛美歌を声を出して歌わない「黙唱」（ただし、心の中で歌う）が推奨かつ実施され、この「黙唱」が1年以上続いているという。

## 「ビフォアコロナ (Before Corona)」には 戻れない覚悟を

新型コロナウイルスの蔓延が始まる前までは、一般社会では「3密（密閉、密集、密接）」を1つの目に見える経済指標としていたところがあったのではないだろうか。

教会も、必ずしも3密を指向していたわけではないかもしれないが、多くの人が集会などに集まり、賛美することに対して、何の疑問も持たずに「祝福された」と考えてきたのではないだろうか。

しかし、最近ではすっかり定着した感のある「新しい生活様式」によれば、引き続き3密を避けて、生活していかなければならない。そして、教会も、かつてのように「多くの人が集まること＝祝福」という定式が根底から覆ったと言えるだろう。もはや、ビフォアコロナ (Before Corona) には戻れない「覚悟」を持つ必要があるのではないだろうか。

## 「アフターコロナ (After Corona)」から

### 始まる新しい時代

同時に、科学的・歴史的視点から、病原菌やウイルスの蔓延は、いずれ「終わる」という視点も持ちたい。そして同時に「新しい時代の幕開け」が始まることも期待してもよいのではないだろうか。

14世紀にペスト（黒死病）が、中世ヨーロッパ大陸を苦しめる中、ルネサンスが勃興、それが宗教改革の契機となったことは、歴史的にも明らかである。もちろん、14-15世紀と現在とは時代背景は異なるが「歴史は繰り返す」ものである。宗教改革で、豪華絢爛な礼拝堂を指向することから、信仰の本質—（聖書のみ）〈恵みのみ〉〈信仰のみ〉—に立ち返ったように、私たちは目に見える祝福ではなく「目に見えない」神の祝福を求めように変えられていくのではないだろうか。

現時点では全く予想がつかないが、アフターコロナ (After Corona) には、神様による「新しい信仰様式」が確立されるのではないだろうか。

## 「ウイズコロナ (With Corona)」の中で

### 神を見上げる

新型コロナウイルスのワクチン接種や特効薬が普及するには、時間がかかりそうである。たとえ、薬やワクチンが行き渡ったとしても、新たなウイルスの脅威がない保証はない。また、近年の地震や災害などのリスクも避けられない。このように、私たちは、リスクとリスクの合間に「一時的な安らぎ」を味わうという極めて不安定な状態が今後も続くであろう。そう

言った意味から、私たちは、当面ウイズコロナ (With Corona) という「曖昧な」世界の中で生きていかなければならない。

聖書の壮大な歴史観に立つと、私たちは、天地創造から神の国の到来の間、正確に言うところ「十字架・復活～神の国」の間に生かされている。終末の時代、この地上は混乱し、曖昧さが続く中、信仰を持ち続ける者だけが生き残ると聖書には書かれている。(マタイ24:13)

ウイズコロナ (With Corona) という「曖昧な時代」の中で、私たちは、今後も息苦しい日々を送っていくことになるだろう。しかし、

同時に「ウイズゴッド (With God) 一神と共に」であることも忘れずに、たとえ不自由な礼拝形式、信仰生活であったとしても、「希望」を持って、神を見上げ、神の御言葉をしっかりと聞いていきたい。

そして、近いうちに「黙唱」状態からマスクを外し、全地が、天の父なる神に向かって「大きな声」で神を心から賛美することができる日の到来を信じていきたい。

## ペスト感染症と賛美歌

ドイツコラールの黄金時代と称されたコラールが多く生まれた時代には、ペスト感染症による死への恐れと不安が常にあり、その中で神に向かって助けを求めるもの、貫かれた神賛美の姿勢等をもとに多くの歌が作られました。5月に開催された「ぐーすた」(超教派による奏楽者のためのオンラインセミナー) 主催オンライン講座「ドイツの讃美歌とペスト」(講師: 小栗献-日本基督教団神戸聖愛教会牧師)での学びの一部をご紹介します。

### 「神はわがやぐら」 新生讃美歌538番

マルチン・ルターの作詞作曲のコラールですが、その背後にペスト感染の脅威があったことはあまり知られていないかもしれません。ルターがヴィッテンベルク大学の教授、教会の牧師であった1527年にペスト感染が町を脅かし、多くの人々が、危険から逃れるために町を離れませんが、ルターは祈りとみことばを人々に届ける責務と、人々の葬りのために町に残りました。当時、ルターは精神的な弱さを覚えており、恐れに取り囲まれていた状況にあったといえます。そのような中で、神への信頼と慰めを歌っていきました。

冒頭のEin feste Burgの“Burg”は「壁に囲まれている要塞」を指し、神という堅固な城壁に守られているという意味を表わしています。「櫓(やぐら)」とすると城郭内に防御や物見のために立てられた建物を指すため、『讃美歌21』では新たに訳しなおし「砦(とりで)」としています。この他「武器」「防衛」「戦場」と好戦的な表現が多く、ナチス政権下では、この歌が「勝利の歌」として使用されたこともあり、戦後はドイツでは賛美歌集から外すことも検討されたほどで、小栗氏はドイツ滞在中に、ドイツの教会でこの歌が歌われたことを聞いたことがないそうです。負の歴史によってもたらされた歌のイメージを消去することが難しいことを知り、音楽が相応しく用いられることの大切さを学ばされます。3節の「あくま」は、教皇派、その時代の脅威であったオスマントルコ軍、ペストを指しているといわれ、人々の心を恐れさせた存在として表わされています。現代ではこの言葉をどのように理解して歌うのでしょうか。コロナ感染危機の経験から改めて考えさせられる「ことば」ではないでしょうか。

# 南九州地方連合伝道部2020年度研修会に参加して

熊本愛泉教会 濱田文代

2021.2.27「賛美歌でつながる福音宣教」のテーマで江原美歌子教会音楽室長よりご講演を頂きました。始めはオンラインでの音楽研修会？というイメージでしたので、果たしてどのようなものなのか半分興味を持って参加させて頂きました。しかし内容は賛美歌についての重要なことであり、神に捧げる歌として多くの人々の手によって歌い継がれ編纂されてきた歴史をさまざまな視点から丁寧に紐解いて下さいました。

賛美という字は言（ごんべん）をつけない字を使っているが、神の言葉を歌い、また神に捧げる言葉として言（ごんべん）をあえて付ける方もおられるといます。普段何気なく使っていることばにも深い意味が込められていることも初めて知りました。今、わたしたちが手にしている『新生讃美歌2003』の説明もして下さり、大変なご苦労のうえに作られた事を知り大切にしなければと思わされました。

質問の中に「賛美歌を歌うとき好きなパートで歌っているが、以前所属していた教会で皆と声を

揃えて歌った方が良いと言われた事があるけれども、賛美歌は本質的に一つの音(ユニゾン)でなくてはいけないのですか？」の問いかけがありました。「いけない事ではないがハーモニーをとるのが目的になって詞(ことば)が疎かになってはいけない、何を大事にするかを押さえることは大切です。」とのお応えが印象的でした。

現在コロナ危機の中、一緒に声を出して歌うことが制限されている中でも、「日々の生活の中で賛美歌を口ずさんだり、ハミングすることを通して、賛美歌のことばが響いてくるのでお勧めします」と教えられ、なるほどと納得したことです。

「賛美歌とは歌うことによる神への賛美である。賛美歌は神への賛美を表現する歌である。賛美であっても、神への賛美でなければ賛美歌ではない。賛美でしかも神への賛美であっても、歌われなければ賛美歌ではない。」4世紀のアウグスティヌスの賛美歌の定義から、賛美の原点を確認させられ、神に捧げる賛美歌をこれからも歌っていきたくて願わされています。

## 教会音楽室からのご案内

### 1) 『新生讃美歌ブックレット』を用いたオンライン研修会を開催しませんか？

連合や、2~3の教会単位で、『新生讃美歌ブックレット』を用いたオンライン研修会を開催しませんか？開催のための費用は無料です！研修会の方法もご相談しつつ、一緒に計画立案していきたいと思えます。お問い合わせはkyoukai-ongaku@bapren.jpまでお待ちしております。

### 2) 「第4回教会音楽カフェ」は 7月6日(火)19:00~21:00 です。

今回は初めての夜の時間帯で、これまで都合がつかず出席が叶わなかった方々にぜひご参加いただきたく願っています。登録は右のQRコードからお願いいたします。音楽関係者のみならずどなたも歓迎いたします。前回の連合別参加人数は東北(3)、北関東(7)、東京(5)、神奈川(2)、関西(1)、中国四国(5)、北九州(2)で、地域を越えて、皆さまと語り合うひとときとなっています。グループ別時間あり。各自、茶菓をご用意ください！





# 北九州地方連合「手話賛美研修会」報告

## 高須キリスト教会 美登 恭子

去る3/20（月・休）、北九州地方連合ではシオン山教会で手話賛美研修会を行いました。

2020年度連合教会音楽委員会の活動を具体化していく段階で新型コロナ感染がどんどん拡大していき、それまで連合に連なる教会の方々と声高らかに賛美し、賛美の豊かさ等を考える研修や講習会を計画してきた委員会が何をすればよいのだろうというところから始まりました。

直方教会に8月より手話賛美をされる田中恵氏が来られる事が分かり、相談をさせて頂く中で、コロナ禍でも感染対策をしっかり行ない、また場合によっては中止も視野に入れて計画を具体化していくことにしました。

まずは、各教会に手話賛美についてのアンケートをお願いし、状況次第との条件はあっても、これまでの研修会等には参加の無かった教会からも関心が示され、まずは委員会のメン



指文字でのふりがな付き名札

バーが「手話賛美」について田中氏よりお話を聞き、単なる言葉を手話で表現すると言うものではなく、言葉の奥にある深い思いを表わす必要があり、特にろう者と聴者が同じ思いで【共に賛美する】と言う事が誰もが共に礼拝に与ると言うことであることを知りました。

密を避ける為に全く同じ内容で大分地区と小倉地区で行い、人数を把握し、休憩をいれて2時間の研修会を計画しました。残念ながら大分地区での日程は感染拡大に伴い中止となりましたが、1回は行う事ができ、29名の方々と手話

賛美について学びの時をもちました。

北九州には教会音楽委員会の働きの一つであるハンドベルクワイアがあり、田中氏の提案でグローリー・リンガーズのハンドベルと田中姉の手話賛美のコラボでの「鹿のように」は、言葉での直接の賛美ではなくとも、手話とハンドベルで作りに上げる賛美を体験できたひとときにもなりました。

聖書の御言葉を表現する時には色々な訳の聖書、文献を開き、また歌詞にある言葉の表現では、単なる言葉ではなく前後の文脈まで考え、その細かい思い等も表現しようとされる田中姉の手話賛美は楽器による賛美等にも通じるものがあり、この時期の礼拝音楽の研修会として「賛美」について深く考える時となり、すべてを導かれ、良しとして下さる神様をより感じる時ともなりました。

また、北九州にはまだ礼拝時の手話通訳を行う教会はありませんが、必要な方が来られてからではなく、手話の必要な方も教会に来られるように、必要に迫られない時から準備することが大切と言う事を知る機会でもありました。



## 礼拝と賛美歌著作権 Q&A

**Q:** 最近、礼拝の動画配信を始めました。連盟から発信されている「著作権申請不要リスト」以外の曲は使ってはいけないのですか？ また、教会員だけの限定公開なら、使っても問題ないですか？

**A:** 新型コロナ感染症の影響が長引く中で、状況が整えられ、礼拝配信に挑戦してみる教会が起こされています。配信を通して新たな出会いや、これまでさまざまな事情で礼拝に集えなかった方とも共に礼拝に与る恵みなど、多くの嬉しい声を教会音楽室でも聞いています。

その中で、心に留めておきたいことは「限定公開なら何をしても良い、ということはない」ということです。礼拝配信等で用いられることの多いYouTubeなどの動画サイトは、正確には「動画共有サイト」と言い、特定・不特定関係なく複数の人と動画を「共有」することを目的としています。また、FacebookやInstagram、LINEなどのSNSも、基本的には会員間で写真や動画などの情報や、コメント等で意見や思いを「共有」することが目的のサービスです。中には、公開範囲設定を制限するなど、限定的な公開にすることもできるものもありますが、限定的であったとしてもインターネットに一度置いたものは、世界中につながっている場所に置いたこととなり、完全に取り除くことはできません。作者の思いと権利を大切にするためにも、たとえ範囲や期間が限定的な公開であったとしても、許可なく無断でインターネット上に掲載することは避けましょう。

宣教部では、『新生讃美歌』の収録曲のうち、連盟だけで著作権の管理をしているものについては、礼拝全体の動画に含むものとしてであれば連盟への使用許可申請は不要としています（2022年3月末まで）。連盟ホームページに「申請不要曲リスト」を掲載しています（右のQRコード）が、それを見て選曲の参考にしている教会も多いと思います。



その他の楽曲については、それぞれの管理者、管理団体によっても対応が異なりますが、連盟と同様に、期限を設けて申請不要としている例も多くあり、日本基督教団出版局もその1つです（詳細はこちら<https://bp-uccj.jp/company/cc2096.html>）。『新生讃美歌』の楽譜下にある著作権表示（©マークから始まる表示です）を確認し、国内のキリスト教団体名が書かれている場合は、直接問い合わせるとよいでしょう。英語の表示がある場合は、国外で管理している場合が多いですが、国外の会社・団体でも、同様に配信を許可する例もあります（Stainer & Bell）。該当曲などの詳細は、教会音楽室へお問い合わせください。

お問い合わせは 電話:048-883-1091(代)  
メール:kyoukai-ongaku@bapren.jp